

Title	「剣の山」から「奸計の国」へ
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 70(2) p.17-p.31
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81070
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「剣の山」から「奸計の国」へ

南田みどり

From 'Da Taung' to 'Maya Boun'—Two novels by Mya Than Tint

Midori MINAMIDA

Mya Than Tint (1929—), a famous Burmese novelist, wrote a long novel 'Da Taung go Kyaw ywe Mi Pinle go Phyat myi'—Over the Mountain of Swords and Across the Sea of Fire—in 1973. It was about three ship-wrecked youths on an inhabitant island in the southern waters. At first, the title was not 'Dataung' but 'Maya Boun'—The Worlds of Artifice—. The title was changed immediately before publication. After two years, in 1975, Mya Than Tint wrote another long novel. Its title was 'Maya Boun' and it was about black marketeers.

In this article I tried to consider, first, about the reason why the author changed the title, the second, about the reason why he used an old title for his new novel. And third, I would like to compare these two novels and also to show their problems.

1. 「剣の山」と「奸計の国」

ミヤタンティン（1929～）は、政治囚として二度服役した。一度目は、1958年から60年。出獄後の彼は、ほとぼしるように創作している。二度目は、1963から68年。このあと彼は寡作となり、創作小説よりむしろ外国小説の翻訳に没頭しているかに見える。二度の出獄後の彼の状況の相違は、その社会情勢とも無関係ではない。彼が最初に出獄した1960年は、ネーウィン将軍の選挙管理内閣にかわり、ウーヌ首相の議会政治復活の年であった。軍事政権下で息をひそめていた知識人にも、自由の息吹が回復した。彼が二度目に出獄した1968年は、既に軍事のクーデター後6年が経過し、ビルマ式「社会主義」の統制が強化されている。これがミヤタンティンの創作意欲にも微妙に作用したことは、十分考えられよう。

獄中生活そのものは、彼の創作意欲をそぐよりむしろ促進するものであった。それは、ミヤタンティンの二度目の出獄後書かれた数少ない作品の一つ「私が続きを書きたい小説」(1974)¹⁾の成立過

程に関する次のような叙述からもうかがえる。「かつて私は、ある不都合から何ヶ月も一人きりになった。一人きりになると、話がしたくなった。本が読みたくなった。しかし、話し相手も読む物もないとなると、私の頭には様々な思考が浮かんできた。小説を書こうと、筋や構成を考えた。…中略…その凝縮した思考と、長期間一人きりで無言でいた状況が結合した時、この小説の形となったのである。」²⁾

だが、その意欲にもかかわらず出獄後すぐに創作はなく、長い逡巡の期間が過ぎる。そしてようやく書かれたのが、絶海の孤島に漂着した三人の若者の物語「剣の山を越え火の海を渡る」(1973)であった。この作品は当初「奸計の国」という題名で、既に広告も出されていた。にわかな改題の事情は、その序文によればおよそ次のとおりである。…登場人物の一人、青年労働者³⁾がミヤタンティンの夢枕に現われ、「奸計の国」という題に反対した。ミヤタンティンが次々と新しい題を示すが納得しない。ようやく納得したのが、油田のガス爆発で消火活動に献身して不自由な身体となった青年労働者を描く中国の短編小説の一節から取った「剣の山を越え火の海を渡る」という題であった。…

改題にまつわるこの叙述は何を意味するのか。ミヤタンティンは、一旦つけた題名が作品のテーマにどうしてもそぐわないと考えた。そのテーマとは何か。序文によれば彼は、人類発展の陰に常に犠牲となってきた少数の英雄の存在に注目した。「人類の安定と発展の為、生産闘争、科学実験闘争、階級闘争で犠牲となった英雄達に敬意を表して」⁴⁾この作品を書いたという。そしてかの青年労働者は、孤島における三つの闘争を指導した偉大な英雄であり、この思想が作品のテーマだという。その青年が作者の夢枕で「奸計の国」に反対したという表現は、作者が「労働者の英雄性」に最もふさわしい題名を求めて悩みぬいたことを意味するのであろう。

はたして、出版寸前のこの改題は適切な措置であったのか。たしかにこの作品は、発表後大反響を呼んだ。とりわけ公の筋から「社会主義リアリズムの手法」⁵⁾「労働者階級の指導性を示す」⁶⁾等の絶讃があいつぎ、現在迄四版を重ねるベストセラーとなっている。ミヤタンティンにとっても、獄中生活をはさんで十年振りの長編⁷⁾であり、出獄後、人々の期待を背に沈黙を続けた後書けた「会心の作」だった筈である。ところが、批判の火の手は彼の予期せぬ方向からあがった。それは左翼文芸批評家マウンターノウによる「剣の山を越え火の海を渡る 又の名を闇撲滅—阿片撲滅」という長文の批評であった。これに対して、「一読者」による「マウンターノウの批判の一撃」という長い反論も登場した。⁸⁾

ミヤタンティン自身のこれらの批評への言及はない。そして二年後、彼は「剣の山」の倍近い頁数の長編小説(上巻1975、下巻1976)を出版した。その題名は、「奸計の国」と名付けられていた。一旦捨てた題名は、何故拾いあげられたのか。それは「剣の山」批判への回答か。「剣の山」の問題点は、既に筆者もいくつか指摘してきた⁹⁾ので、新たに論ずるつもりはない。本稿は、マウンターノウと「一読者」による「剣の山論争」を紹介する中で「奸計の国」から「剣の山」への改題を再考し、次に「論争」と新・「奸計の国」とのかかわりを考察して、現代ビルマ小説の問題の一つを

再確認するものである。

2. 「剣の山」論争

「批判」は、第一に文体構成等全体的な問題を指摘し、第二に人物像を、第三にテーマを批判する。その狙いは第三点にあり、第一、第二の部分はその導入である。対する「反論」は、上記のうち第一、第二の部分に紙面の多くを裂き、第三の部分については十分な記述がない。毛沢東、レーニン等先人の著作の引用が多く、「批判」の意図への誤解や曲解が多く、かみ合った論議とはいえない。また「批判」は、作品そのものを対象とするが、「反論」は批判者へのやや感情的な個人攻撃を随所に示し、「剣の山」の作品そのものの積極的評価も多くは見られない。従って、これらのやりとりを「論争」と呼ぶには考慮の余地があることを念頭に置いた上で、以下に「批判」の展開に沿って「論争」の概要¹⁰⁾をあきらかにしよう。

第一の文体構成等全体的な印象について、「批判」はおおよそ次のように言う。……出獄後初の小説で、巻の評判もよい。おおいに期待した。ところが、従来のミヤタンティンの文体の技量に達していない。言葉はうわすべり、会話体にも不自然な箇所が見られ、作者の博識のひけらかしもチラチラする。導入部は陳腐で、まだロビンソンやガリバーの方が斬新である。筋の展開を孤島での三人の若者の自然との闘争に留めておけばよいものを、ミステリー仕立てで闇商人を登場させ、劇画まがいの活劇を取り入れ、中途半端な幕切れである……と、文体等に関しては印象を語るに留まり、具体例は一切あげられない。また構成に関する批判はテーマとかかわるものとして、後に詳述される。

これに対し「反論」は、おおよそ次のように前置きする。……文芸批評家たるもの、毛沢東のいう二つの基準一政治的基準と芸術的基準一にのっとり、誠実に批評すべきである。マウンターノウがこの基準を用いたか、マウンターノウ、ミヤタンティンのいずれに誠意があるかを検討することが、本稿の目的である。……次に、上述の批判におおよそ次のように二面から応じる。まず……「剣の山」はガリバーやロビンソンと形式は似るが、内容や思想は新しい。それは今日の政治的思想性を反映する……と。だがそれがいかなる新しい内容や思想を表わすか、「反論」は具体的にあげない。そして、……階級闘争あるところ活劇場面は必ず登場する。マウンターノウが活劇を嫌うのは、彼が階級闘争から遠ざかっていることを告白したものである……という。後述の如く、マウンターノウは「階級闘争」における活劇場面を否定したのでなく、「階級闘争」ではない活劇は展開上不要だと主張したのである。「階級闘争」についての両者のとらえ方の相違が、「論争」をかみ合わないものとしてゆく。

第二の人物像では、両者間にやや接近が見られる。マウンターノウは、詩人・ナンダーと不良・イエミンの家庭的背景、労働者タンジャウンの不遇な生いたちの描写を評価し、「一読者」はこの三人の中に、知識人対労働者、生活に意欲的な若者对未来に希望のない若者、若者対大人の矛盾が描かれたことを評価する。しかしナンダーについて「批判」は……このような博識家は旧教育制度下には存在したが、現体制下の学生は学業のみに窮々とし、広範に読書する時間も知性もない……と、その非現実

性を指摘する。「反論」は現教育制度の害悪を認めつつも……制度の害は、指摘するに留まるべきでなく、改革にむけ実践すべきだ。しかるにマウンターノウは塾教師という職に安んじて何ら行動しない……と、個人攻撃に矛先を変える。

イエミンについて「批判」は、およそ次のように述べる。……イエミン不良化の原因を家庭に求めるのは誤まりだ。青少年問題の根源が政治であることをぬきにして、いたずらに青少年の意識高揚や勇気を強調するのは、一部の^{人々}の常套文句と何ら変わらない。イエミンはまた、本物の不良でなく道しるべを失なった青年の代表である。不良は徒党をなし、武器を携行し、罪なき市民に狼藉を働く。イエミンのナイフは護身用で、その精神は基本的に健全である。そんな青年がタンジャウンに憧れ、労働の中で麻薬を断つことは可能だが、本物の不良が同様の方法で更生する保障はない。根源の政治問題にふれずして解決策らしきものを漠然と示すことは、抑圧階級を弁護するものだ。……これに対する反論は、およそ次のように正面からなされる。……イエミンが不良でない^{とみなす}ことはヘロイン中毒青年への迎合に通じ、危険だ。また、ミヤタンティンはアメリカのヒッピー批判の中で、資本主義体制から不良が生まれることをナンダーに語らせ、暗に青少年問題と政治の関係にふれている。マウンターノウは、影を示しただけでは実体がつかめぬのか。……作品の中で、不良化の責任が家庭にあると語るのはイエミンであって、作者ではない。従って、それがミヤタンティン自身の言葉だとは、必ずしも即断できないであろう。不良化が腐敗政治の反映だと明確に表現できる状況か否か、作家たるもの考慮すべき筈であるから。

三人のうち「最大の問題」がタンジャウンだとして、「批判」はおよそ次のように言う。……英雄タンジャウンの生い立ちの描写は完璧で、読む者の胸を熱くし、実に興味深い。だがタンジャウンは、ミヤタンティンが描きたがった階級的英雄ではなくルンペンプロレタリアートだ。もし労働者階級の英雄を描きたくば、哀れな生い立ちだけでは不十分で、階級闘争を闘う労働者を起用すべきだ。ビルマに工場労働者は数多くない。が、油田労働者でも、船渠労働者でもよい。階級闘争を闘わせるなら、なぜそれらの中から英雄を選ばないのか。タンジャウンは、階級闘争はおろか生産現場にすらいない。立場を同じくする働らく者の集団にいたとは言え、それは漁夫として舟に乗り、闇屋の手下として荷を担ぎ、水夫として密輸船に乗っただけである。こんな人物に労働者階級の看板をつけ、孤島における生産活動での奮闘を描き讃えることは、一部の^{人々}が漠然と「労働者の指導」云々と唱えるのと何ら変わらない。……

労働者階級の英雄ではないタンジャウンがいかにもそれらしく扱われたことを、マウンターノウは問題にする。これに対し「反論」はおよそ次のように言う。……マウンターノウはタンジャウンが気に入らないらしい。タンジャウンがルンペンプロレタリアートで闇屋の手下だからだという。しかし「闇屋の手下」という表現は適切ではない。手下は親方の仕事に共鳴して行動を共にするが、タンジャウンは借金返済のため不本意ながら密輸船主の賃金奴隷となったのである。タンジャウンが労働者階級の英雄ではないというマウンターノウの指摘は正しい。タンジャウンは労働者の英雄ではなく、ナンダーとイエミンの英雄である。マウンターノウは、タンジャウンのかわりに油田労働者か船渠労働者を使えと勧める。しかし、海を知らぬ労働者がこの作品の英雄とはなり得ない。海に生まれ海に育ち海に通じたタンジャウンこそが自然との闘争を指導でき、この作品におけるリアルな人物像となる。タンジャウンがリアルな人物像となり得ないというマウン

ターノウの批判は教条的である。……

ここにも又、「批判」への曲解がある。マウンターノウはタンジャウンが気に入らないわけではない。その登場や背景の描写は、評価している。ただ、労働者階級の英雄でないものをそれらしく扱うことを批判したにすぎない。たしかに序文でミヤタンティンは、タンジャウンを「労働者階級の英雄」とは呼んでいない。しかしミヤタンティンは、「生産闘争、科学実験闘争、階級闘争」を孤島で指導して命尽きた労働者の英雄性なるものを描こうとしたのであり、そのために改題迄したことを言明しているのである。だがはたして、「労働者階級の英雄」ではないが「階級闘争」を指導する英雄的労働者なるものが存在するのか。マウンターノウはまた、「階級闘争」を描きたくば労働者階級に属する人物を起用すべしと述べただけで、それらの労働者を孤島に漂着させよとも、タンジャウン像がリアルでないとも主張していない。タンジャウン批判はナンダー、イエミン批判と質を異にし、テーマ批判にかかわるものである。

第三のテーマ批判はおよそ次のようになされる。……孤島に三人が漂着する。詩人は役に立たず、不良はヒロインを断ち荒々しい現実^{クラー}に身をゆだね、以前から抑圧されていた人夫のみがたくましく自然に対峙し、残る二人を指導する。人間と自然の対決—本当なら書くことが可能なのはここ迄だ。これで十分なのだ……と、これ以上の展開が不要なことが再度強調される。そして……「剣の山を越え火の海を渡る」は何を意味するのか。自然との闘争か、階級闘争か。ミヤタンティンは両者を混同して示す。自然の猛威は階級発生以前と発生初期にふるわれ、階級時代はそれにかわって階級闘争が登場する。自然との闘争を階級闘争と呼ぶなら、これほど無謀な史的唯物論の歪曲はない。絶海の孤島での闘いに登場する英雄は、階級闘争の英雄ではない。弱肉強食の常に従い、最も体力のある人物が生き残る。その人物を「労働者」と呼べば、労働者階級を讃える小説になるのか……と、労働者階級に属さぬタンジャウンを「労働者」と呼んだところで、孤島でのタンジャウンと自然の闘争が「階級闘争」と呼ぶに値しないことを強調する。

この点は当のミヤタンティンが十分理解していた筈である。文明と無縁の原始社会で、タンジャウンの指導で展開する採集生活、刀や火の発見による生産の前進が、序文の「三つの闘争」のうち「生産闘争、科学実験闘争」しか具現せぬことを、彼は承知であった。しかし彼は、毛沢東の言う「三つの闘争」¹¹⁾にあくまで拘泥し、残る「階級闘争」を何らかの形で入れようとした。そこで終幕近く、タンジャウンの雇主で母の仇でもある闇屋の元締バヤンが、実は既に島に漂着していたという設定で突然登場する。これについて「批判」はおよそ次のように言う。……タンジャウンとバヤンの争いは階級闘争ではない。ただ、職場でタンジャウンがバヤンの抑圧に反撃するなら、労働者的闘いと呼ぶ可能性はある。だがそれも、一匹狼の闘いでなく労働者集団が団結して闘う形態をとるべきだろう。食糧を盗み、作りかけの筏を横取りするバヤンとタンジャウンの格闘は、もはや雇主と使用人の争いではなく「泥坊と家人の格闘」である。……これによってマウンターノウがタンジャウンを三人の青年像の中で「最大の問題」と指摘した理由がさらに明確となる。自然との闘争の中に階級闘争に似て非なるものを持ち込み、自然との闘争における英雄をそのままそこでも英雄としたことが「問題」なのであった。タンジャウンは労働者^{アロウター}よりむしろ人夫^{クラー}と呼ぶべき階層の人物であるにもかかわらず、ミヤタンティ

ンが序文に「労働者」なる呼称を用いたこと自体が、誤解を生じる要因となったとも言えよう。

マウンターノウは、労働者階級を代表せぬタンジャウンが敵すなわち資本家階級を代表せぬバヤンと闘争することが階級闘争と呼ばぬことを指摘し、これを階級闘争と呼ぶことが作品「最大の思想的欠陥」でかつ危険ですらあると、およそ次のように指摘する。……それは、国家の経済的混乱が全て闇のせいだと指摘したが一部の人々の思想と瓜二つだ。闇は枝葉末節であり、本質ではない。闇は国家機構を建設できない。闇ごときは仰々しく扱うに値しない。ミヤタンティンが密輸船主を主要な敵として示すことは、闇反対の評論や劇画を書く一部の人々の言いぐさとどう違うのか。政治体験の未熟な読者、革命と改良の区別のできぬ人々は、闇を偉大な敵、闇との闘争を革命だと思い、真の敵、真の闘争から目をそらす。これは労働者階級の英雄の物語ではない。帝国主義者と改良主義者の喜ぶ小説、闇撲滅、阿片撲滅の改良小説である。……ミヤタンティンが改題迄して強調したテーマそのものが、こうして痛烈な批判的となったのであった。

「反論」は、この点について多弁ではない。ただ、バヤンが三人の刀を奪った点についておよそ次のように言う。……「剣の山」は可能な限り階級闘争を指向したことがうかがえる。島で最も重要な生産手段である刀を、人々の為でなく自己の利益に使うのは資本家の発想である。刀の独占者から刀を奪うのは、労働者が資本家から生産手段を奪うことを意味する。刀はまた武器・権力であり、刀を奪うことは権力を奪うことである。これがここで示し得る階級闘争の限界である。……問題は、「階級闘争」を指向したが十分示せなかったことであるのか。「反論」はあくまで、バヤンとタンジャウンの争いが「階級闘争」であることを前提とするが、「批判」の狙いはそれが階級闘争であることを否定することにある。「階級闘争」への認識の相違、これが「論争」が平行線をたどった最大の原因である。

「反論」は最後におよそ次のように言う。……マウンターノウの「剣の山」批判は、文学界の主要な矛盾を代表しない。真に害毒となる文学を批判せず、「剣の山」が帝国主義者と改良主義者を喜ばす文学だと断言するのは、マウンターノウに誠意のない証拠である。「剣の山」には技法的弱さや意志の性急さもみられ、たしかに完璧とは言い難い。だが作者の誠意はうかがえる。マウンターノウが批判するほどの問題はない。ミヤタンティンは、プロレタリア革命思想を重視する作家である。しかるにマウンターノウは、高度な水準を要求して革命文学のみを求め、「剣の山」をその物差しで測って異義をとなえている。人民の状況を学び、普及と向上に努めるべきである。性急である必要はなく、又遅れをとってもいけない。マウンターノウこそプロレタリア革命思想を読者に本格的に普及することに成功していない。自分にできない仕事を他人がやるのが面白くないと叫んでいるのだ。マウンターノウの批判は、革命的な人々の心を分裂させる、資本家たち、帝国主義者たちの手先の一撃である。……「一読者」は、マルクス主義を公言する作家間における打撃的批判を慎むよう促した。だがマウンターノウは、ミヤタンティンに革命文学を書くことを要求したのではなく、曖昧な表現の危険性を指摘したにすぎない。しかしその真意は理解されぬままであった。

「論争」は、良心的作家の現状の一端を物語るものである。建前としての厳しい言論出版統制は、ビルマ式「社会主義建設」に貢献せぬ作品に厳しい目を光らせる。一方、純文学の発行部数をはるかにしのぐ娯楽作品や劇画は、「社会主義建設」を破壊しないという意味での貢献を認められ、検

閥の網の目をくぐりぬける。この状況下、「階級闘争」を描きたがったミヤタンティンの心情も、理解されぬわけではない。

「論争」へのミヤタンティン自身の言及はなく、「問題」の序文は1981年出版の第四版にもそのままのせられている。だが「論争」が彼に与えた影響として、少なくとも二点が考えられる。第一は、「剣の山」日本語版序文（1983年1月筆）である。そこで彼は「剣の山」が「ビルマの社会問題を描こうとしたもの」¹²⁾と強調し、およそ次のように述べる。…1960年代後半、世界各国で世代の断絶が深まり、科学技術の発展と新しい時代の混迷の中で、若者の精神の衰退が見られた。この問題をいかに解決すべきかを示すため作品を書いた…と。また、作品の主要人物として、三人の若者にバヤンを加えた四名をあげる。そこでは、タンジャウンは「労働者」ではなく「田舎者の無産者」と呼ばれる。この四名の矛盾、苦悩、闘争を描いて「生存の為の闘争で誰が最も誇り高いか」¹³⁾を示したのだという。四名の矛盾という語は、「一読者」の「三名の若者相互の矛盾を示した」という評価と奇妙にも符合する。しかし、「日本語版序文」どおり、この作品が社会問題をテーマとしたと解釈するならば、その題名も又「剣の山を越え火の海を渡る」である必然性はなくなるであろう。むしろ「奸計の国」で十分であったと言えはしないか。

「論争」の第二の影響は新・「奸計の国」執筆である。この作品が「剣の山」と無関係なテーマを持つのであれば、一旦捨てたいわくつきの題名を、敢えて拾い上げる必要があるのか。新・「奸計の国」は、「剣の山」で作者が言い足りなかったことを補足するものであろう。孤島から回想した社会問題でなく、社会問題を正面から扱うことで、「論争」への回答が試みられたのである。

3. 「奸計の国」

ここには、「剣の山」序文の如き仰々しい序文はない。筋、人物、場面はすべてフィクションで、もし不都合な点あれば容赦願いたいという作者の簡単な断わりが付され、出版社によって、一冊で出版する筈が紙配給が遅れて分冊になったこと、作者の旅行から案が得られたことなどが述べられるのみである。作者自身の作品への言及がない以上、まずその題名の意味するところから考えるべきであろう。

「剣の山」がかつて「奸計の国」と題された時、「奸計」には二つの意味があったと考えられる。第一に、大自然の脅威一海めぐらす様々な奸計、第二に、三人の若者が暮らしていた社会における様々な奸計である。ここでは前者が主で、後者は従であった。我々は架空の孤島から、三人の回想を通して社会問題を垣間見た。第一の奸計は、海の男の英知と勇気で克服された。しかし彼の死後、救出された二人の若者の帰る社会における奸計はいかにして克服されるのか。それは可能か。新・「奸計の国」はこれを追求した作品である。従って「剣の山」続編と見ることも可能であろう。ここでは、第一の奸計は川である。ビルマ中部ザガイン管区を流れるチンドゥイン川の支流マフーヤ川、ヤマー川、ミッター川。それらは乾季には穏やかな美観を呈しながら、雨季には豹変する。

川幅を広げて咆哮をあげ、蛇の如くのたうち流れながら、人も家も車も飲み干す。だがこの自然の奸計はここでは従であり、主は社会、とりわけこの地方を舞台とする「闇」の世界の奸計である。

ビルマ社会で「闇」が今や不可欠であるのは衆知の事実であり、それはしばしば、小説の題材にも扱われてきた。経済停滞、慢性的な物不足の中で「密輸の規模はビルマの消費全体の四分の一に達」¹⁴⁾し、「密輸に何らかの形で関る人数は、ほぼ五十万人と推計される」¹⁵⁾ともいわれる。密輸はビルマの陰の経済を支配するのみならず、反政府軍の資金源ともなっている。一説には、現在ビルマに十種類の密輸ルートがあり、うちタイービルマ間の陸路が六ルートで、その他は、マレーシア、シンガポール、タイとの海上ルート、中国雲南省とのルート、インドとのルート、バングラデシュとの海上ルートであるという。¹⁶⁾これに従えば、「剣の山」でイエミンが家出後担ぎ屋をしていたのはタイとの一ルートであり、彼等が乗ったのは海上ルートの密輸船だったわけである。「奸計の国」に登場するのはこれらのうち、モンユウ、イエウー、カレーワ、カレーショウ、タムーを通るインド密輸ルートの主要交通路、通称No.9ルートである。ザガイン、マンダレーを集積地に、インドから機械部品、自転車、白布地、雑貨などが送られ、ビルマからは米が送られるが、交通路は熱帯多雨の森林地帯で、交通量は天候に左右され、一年の半分を占める雨季の間は交通がとだえる難所だという。¹⁷⁾

このルートの他、作品はミッター川沿岸の炭鉱や、密輸都市モンユウを舞台に、運び屋エーマ、密輸を嫌う失業者コウミン、密輸の元締ウーミヤミンを主要人物とし、エーマが闇に深入りしてから死ぬ迄の約二年を、最初エーマの視点で、後にコウミンの視点で語る。作品の柱となるのは「剣の山」日本語版序文でも作品の中心としてあげられた「人物間の矛盾の描写」である。第一の矛盾は、エーマとコウミンの愛憎である。その名前一涼しい女一と正反対の火のような女エーマは、若い人生への甘さはない。他人の世話になるのは恥、生まれるのも死ぬのも一人、心の友は不要と、一匹狼の哲学に徹する。思考より行動が先走り、根気のいる農業のような仕事よりむしろ、労多くても一挙に終えて解放感にひたる仕事を好む。彼女の体験したあらゆる職種はいずれも食べるだけでせい一杯で、母の薬代や勉強好きの妹トゥマの学費はおぼつかない。品性をおとしめ法を犯す闇を拒み続けてきたが、貧困という病を治療する薬は闇以外にない。薬の効めは当座だけで、これを飲めば別の病に侵されるのは承知だがやむを得ない。今は誰もが商人の時代。闇は誰もがかわる必要悪。そう自分を納得させ、エーマは闇の世界へ入る。エーマは「剣の山」のタンジャウン同様、虐げられる庶民を代表する。タンジャウンはバヤンの債務奴隷として闇に入り、バヤンと闘うが、エーマは自分を合理化して闇に入り、生活の為に闇を利用したつもりが、一つの駒として逆に利用されてゆく。それに気づき、ウーミヤミンの仕事と手を切ろうとした矢先、彼の娘婿で女たらしのネーリンアウンに襲われ、増水したヤマー川に二人共飲まれる。ヤマー川のほとりに生まれ育ち、川の奸計を承知しながら川に散るエーマは、社会の奸計にも敗北した。エーマは奸計をあなどり、奸計に自滅する人物である。

一方コウミンは、奸計に対立する人物として描かれる。エーマが現実を肯定し、それに妥協しな

がら道を開こうとする現実主義者なら、コウミンは理想主義者、一種の求道者である。思索家で非暴力主義者。自己を犠牲にして他人に尽くす献身的人物。法を破ることが品性をおとしめると信じ、清潔で合法的な職を求めて全国を渡り歩く。富も地位も求めない。エーマのように養うべき家族がないだけに、その理想主義は観念的な甘さを伴なう。だが彼の人生の前半は、エーマ以上の辛惨を極めていた。父の死、母の再婚、義父との不和、家出、親戚を手伝いつつ通学。読書好きで成績良く、校長の援助で高校へ。校長の転勤で退学、帰省。義父が彼の妹に手を出していたのに反撥、義父を傷つけ家出。軍隊に入り、無実の罪で投獄。監獄生活が彼に再生をもたらす。人生に否定的懐疑的だった彼が、以後精神的に安定し、人の心を理解し、楽観的となる。世を恨まず誠意を持って人と接し、友も増える。彼の求職の旅の終着点は友人ペーキンのいる炭鉱、つまり労働者＝光の世界であった。炭鉱の雑役を経て彼は臨時鉱夫になるが、人員削減で解雇され、ペーキンと共に遂に闇の世界に入る。だが彼は希望と信念を失わず、闇と光の間をたゆたいながら最後に炭鉱に正式採用され、光の世界に至る。コウミンは「剣の山」のナンダー像をいく分継承する。博識家ナンダーは現実社会に働きかけなかったが、思索家コウミンは理想を求めそれを実現する積極的青年像、奸計をあなどらずそれに挑戦し続けた人物として描かれる。

闇と光、エーマとコウミンの愛憎はどう展開するか。エーマにとってコウミンは、周囲の男達と異質で新鮮な存在である。「だけど人生が闇ばかりなんてことはあり得ない。光があるからこそ闇ってことばも存在するのさ」¹⁸⁾というコウミンの励ましは、エーマの心に光をともした。彼女は生涯で初めて、心を許せる相手にめぐり会ったと感じる。コウミンの理想主義を人は馬鹿にするが、彼女はその潔癖さを尊重する。だが他方彼女は、ネーリンアウンの有能な片腕としてヒロインや宝石の売買にも携わり、したたかな闇屋に変貌してゆく。当初の目的たる妹の学費も母の薬代も確保し、借金でモンユワに家を買ひ、身を飾る。コウミンの目からは、彼女が果てしなき物欲のとりこ化してゆくように見えるが、彼女のコウミンへの気持ちはあくまで純粋である。同業の男には目もくれず、家の借金完済の暁にコウミンと世帯を持ち、ウーミヤミンと手を切って自分の元手で商売することを夢見る。自分は汚れた世界にいても、コウミンには光の世界を歩かせたい。コウミンは彼女の希望であるのだから。

だがコウミンには、エーマの存在そのものが奸計であった。最初彼はエーマのけなげさを愛し、同情した。だがエーマは彼の身の上を聞いて、彼の父殺しの犯人が自分の父であったことを悟り、彼のもとに紙幣を残して姿を消す。彼女の荷を運び、その身を守ってやった好意を彼女は利用しただけだと彼は誤解し、衝撃を受ける。自分に誠意があれば他人にも通じるという信念は、奸計に満ちた闇の世界には通用しない…と、コウミンはエーマに憎しみすら抱く。彼が二度目にエーマに会った時、彼女はかつて軽蔑したやり手のマサンインの相棒となっていた。エーマは自分が姿を消した真相を語り、二人の気持ちは再び接近する。しかし闇を利用して幸福を手に入れようとするエーマの姿は、コウミンには非常に危なっかしい。エーマが仕事のことでしばしば彼の問いをはぐらかすことや、彼女の家に入出入りするネーリンアウンの存在にも疑念と不信をぬぐいきれず、彼はエーマ

の愛に確信が持てない。奸計の女エーマへの彼の愛憎と葛藤は、エーマの死によって終る。

エーマへの彼の不信と葛藤は、闇に対する不信と葛藤の反映でもある。彼は、エーマや鉱夫ペーキン、フラチョウらとしばしば闇をめぐって論議する。エーマは言う。…闇屋には三態ある。第一はウーミャミンのような大金持、第二は役所や組合の特権を利用して物資の横流しをする公務員、そして第三がエーマのような貧乏人。金のない者は金を得る為に、金持ちはもっと金儲けする為に闇をやる。好きで闇をやる者も、やむなく闇をやる者もいる。本人がそれと知らず闇をやる場合もある。コウミンの衣服も闇から買ったもの。買いたい者は買い、売りたい者が売るのでからこれは単なる商売。盗むわけでもない。迷惑かけるわけでもない。二者の間に合意があれば成立する仕事だ。死んだ理論に縛られず、時代を知り、即応するのだ…と。光の世界の住人達もコウミンほど潔癖ではない。ペーキンは言う。…飢えても戒を守る気か。時代と共に価値観は変わる。現在商売している者で闇に手を出さぬ者がいればお目にかかりたい…と。ペーキンには観念的な奴と呼ばれ、フラチョウには小説の主人公ヅラする奴と揶揄されるコウミンは、時代を川に、彼自身を舟付き場を求めて得られず川をたゆとう小舟の舟頭になぞらえる。生活上闇が不可欠であること迄は認めても自ら手を染めなかった彼が、やむなく闇を始めた時、彼は「墮落」した身を恥じる。道徳や品性は飢えを知らぬ者の言葉。飢えた者には通用しない…と、したたかに酔う。しかしその仕事は摘発され、職探しにモンユワに下った彼に、同郷の旧友トゥンアウンが再び闇に誘う。コウミンは迷うが、エーマへの不信も作用して誘いに乗ろうとする。この世は悪の世界。自己の利益のみ求める世界。他人に同情し、他人の為に尽くしても評価されない世界。法を優先させても何の利もない。かくなる上は墮ちるのだ。どうせ悪をやるならトゥンアウンのように大胆に、良心を殺して冷静に…。ウーミャミンの商売仇ウーチンセインの配下・トゥンアウンは、ヒロインの販路拡張に乗り出す為ウーミャミンの前歴を洗い、ネーリンアウンやエーマの動勢を探っていた。だが、コウミンが「墮落」を決意した時、トゥンアウンは既にネーリンアウンの手下に殺された後だった。コウミンはエーマにウーミャミンの前歴を告げ、炭鉱へ帰る。トゥンアウンの死と炭鉱からの召還という偶然が、コウミンと闇との葛藤を打ち切り、彼を「墮落」から間一髪で救う。

作品は、闇と光を象徴する対象的な男女の矛盾を第一の柱とした。第二の柱は、彼等の属する非力な庶民の世界と金持ちの闇商人の世界、奸計をあやつる者とあやつられる者の矛盾である。「剣の山」のバヤン像を継承する闇商人の生態が、さらに具体的に描かれる。例えばウーミャミンの一日たりとも破られない優雅な毎日の習慣は…五時、起床し仏間で勤行。六時、お茶を飲み新聞を読む。八時、マンダレーへ電話し相場を聞く。八時半、事務所に顔を出す。十時、食事。昼寝の後リプトン紅茶を飲み客をもてなし、モンユワ市内の土地建物を見回る。五時、自宅の花園を散歩、勤行。六時、夕食。八時、ラングーンへ電話し相場を聞く。十時、就寝…他人の為に尽くす信心深い金持の顔。道徳や品性はこのような人物の為に存在するかのようである。だがその前歴は…大地主の息子で、日本軍政期は通訳、英軍優勢となるとその諜報部隊入り。独立後は議員や政府次官を勤める傍ら、妻名義で商売を始める。クーデター後逮捕され、釈放後は商売に専念。モンユワで不動

産の売買を表向きの職とする。政府上層部にも通じているので身の危険はない。商売のやり方は古風で、相手を選び、確実なものにしか手を出さない。

一方中国人との混血ウーチンセインは、茶の商売からデパートへと手を広げた叩き上げの商人で、クーデター後は劇場とデパートの接收、高額紙幣の回収等で痛手を受けるが、今は昔より羽振りがよい。商売のやり方は近代的、投機的である。常に儲ける必要はなく、儲けの不確実な商売も楽しい冒険だと考える。彼の賭け仲間で旋盤工場主の息子ネーリンアウンは、高校中退後ウーミャミンの婿となったが、妻とは冷えた関係が続く、各地に妾を持つ。ウーミャミンの計画の大胆な実行者で、ジープの輸入から宝石やヘロインの輸出へと手を広げる。彼等は政変にも痛手を受けず不死鳥のようによみがえり、時代の流れに巧みに竿さし渡る。やむなく闇に入り、抜け出せない人々を食い物にし、金儲けを楽しみ、闇の世界を支配する。

エーマ・コウミンとウーミャミンの間には、単に庶民と闇商人という関係が存在するだけではない。元反乱軍兵士で反骨精神たくましいコウミンの実父は、1956年の議会選挙で野党議員応援中、与党の刺客であるエーマの父に殺された。殺人の命令者は当時議員のウーミャミンであった。つまりウーミャミンは、コウミンの父の仇にあたる。トゥンアウンの調査によればウーミャミンの父が村の女に生ませたのがエーマの父である。ウーミャミンとエーマの父は異母兄弟だが主従関係にあり、エーマの父はむしろ被害者である。また、エーマが他人を信じぬ一匹狼になった背景にも、ウーミャミン一家が存在する。彼女が少女の頃、ウーミャミンの姉娘が大学の農村調査でエーマ宅を訪れ、その境遇に同情してエーマをモンユワに連れ帰った。エーマは妹娘マーラーと中学に通うが、帰宅後は女中扱いで勉強する時間はない。学校は生徒数が多く教師は不親切で、塾に通わぬエーマは中卒試験に二度落ちる。さらにネーリンアウンがマーラーに近づく手引きをしたと誤解され、ウーミャミン宅をお払い箱になる。この屈辱の体験が人を信じぬエーマを作った。エーマもコウミンも、その不幸な人生の陰にウーミャミンがいる。「剣の山」でタンジャウンにとってバヤンが、雇主として抑圧者であるのみならず母の仇でもあったと同様、エーマ・コウミンとウーミャミンの間に個人的怨恨がからむ。

闇と光を象徴する男女の愛憎と、闇をあやつる者とあやつられる者の矛盾を柱にした「奸計の国」の構成や筋の展開には、しかし次のような問題が見られる。41章から成る作品の舞台は、主に密輸ルート—炭鉱—密輸ルート—モンユワ—炭鉱—モンユワと移動する。このうち約半分を占める密輸ルートを舞台とする部分は、コウミン・エーマの出会い、検問を避け悪路をゆく闇屋達のバス旅行、回想による二人の生いたち、闇をめぐる二人の論議等から成り、リアルなまとまりを持つ。だが舞台がモンユワに移ると状況は一変し、「剣の山」をしのぐミステリー仕立てとなり、活劇も登場する。こうした通俗的傾向は、数多くの偶然や因縁が筋の展開上不可欠とされるところにもみられる。コウミン・エーマの父とウーミャミンとの過去の因縁、行方不明のエーマの父が密輸ルート途上の寺の僧となっていた偶然、一旦訣別したエーマとコウミンが一度は密輸ルートで、一度は病院で再会する偶然、コウミンの身に危険が及んだ時炭鉱に欠員が生じる偶然…偶然や因縁が多用されるほど作

品は読者に迎合した娯楽的要素を増してゆく。

通俗的傾向や蓋然性に乏しい展開の背景として、二つの問題が考えられる。第一は、闇の世界の形象化という問題である。ミヤタンティンが、数ある社会問題のうちから闇を取り上げたのは何故か。それは、闇ごときを仰々しく扱うことは真の敵を見誤らせるもの…というマウンターノウの「剣の山」批判の故ではないか。苦しみの根源は闇そのものではなく、闇を不可欠とする経済の仕組みにあるとしても、現実には闇に苦しむ人がいる以上闇は無視できぬ社会問題である。従って闇の世界の形象化は追求されねばならない…。これが「奸計の国」を通したミヤタンティンの「剣の山」批判に対する第一の回答であった。闇の世界の両極・闇をあやつる者とあやつられる者のうち、後者を代表するエーマの描写の現実性は、作品前半の密輸ルートを舞台とした部分のまとまりの一要因をなしている。問題は、闇をあやつる者達の世界である。「剣の山」のバヤン以上に詳しく叙述されるウーミヤミンの表と裏の顔、ネーリンアウンの退廃的生活…それら闇商人の悪徳をさらに強調する為、過去の因縁やミステリーや活劇が活用されたのである。闇の世界の形象化はこれらをぬきに存在しないのか。またここに、マウンターノウの言う、「剣の山」を読んだ人々が闇商人を真の敵だと見なす「危険性」と同様のものが存在しないと言えるのか。また、「敵」らしきものの実体を明らかにする必要性が必ずしもあるのか。これらの疑問は、第二の問題ともかわりを持つ。

第二の問題は英雄像の形象化である。闇をあやつる者とあやつられる者・ウーミヤミンとエーマの矛盾に加えて、コウミンを登場させたのは何故か。コウミンは「剣の山」のナンダー像を継承し、半ば作者の分身的存在である。彼の言葉の多くは作者の主張であろう。しかし彼の中にはタンジャウンを継承する要素も見られる。それは「労働者」像という点においてである。コウミン像は、タンジャウンが労働者階級の英雄ではないという「剣の山」批判への回答である。タンジャウンは孤島における英雄であったが、労働者階級に属さない。故に現実社会において階級闘争を闘う英雄にはなり得ない。従ってミヤタンティンは、労働者を志望し労働者となるコウミンを創造した。しかし、無口で粗野だが決断力、行動力、勇気のあるタンジャウン、饒舌で博識だが、決断力や行動力に欠けるナンダーといった典型化は、コウミンにおいては成功していない。不幸な生い立ちを持つ庶民の代表、読書による水準以上の知性を持つ知識人、思索家的側面、勇気ある理想主義者、そして労働者…コウミン像はナンダーとタンジャウンの一部をあわせ持つ作者の観念の産物、現実性に乏しい人物像である。彼を再生させたという監獄生活についても十分な描写もなく説得性に欠け、闇を拒否し続けてきた彼が闇に入るといった心境の変化もやや描写不足である。このヒーロー・コウミンには「闘争」が必要であった。そこで、コウミンの「敵」となる闇商人達の悪徳が、ことさらに強調されたのである。だがここには、タンジャウンとバヤンの「格闘」のようなコウミンとウーミヤミンの対決場面はなく、その「闘争」は、かろうじてネーリアウンならびにその手下とコウミンのいくつかの小ぜりあいの描写に留まる。コウミンは、闇撲滅闘争の闘士となり得ず、闇への転落をかろうじて脱することに成功した幸運な人物にすぎない。

作品はエーマの六ヶ月の命日、ヤマー川のほとりにエーマの妹トゥマとたたずむコウミンの感慨

で終る。石炭はその輪廻の中で形が変化しても元に戻っていくが、人の心は戻らない。エーマもその父も、トゥンアウンも、生来のまっすぐな心が転落の一途をたどった…と、コウミンは人の心のうつろいやすさを思う。また彼は、闇に対する自分の意識の変化を思う。以前は闇を毛嫌いしたが、今は一部の金持ちを除き、闇屋を哀れと思う。だが解決の糸口は見い出せない。二年の体験は彼に悲観的な思いをもたらしたにすぎない。それでもコウミンは、希望を失わない。

「コウミンにとって闇は問題ではない。誰もいない洞窟の暗黒の闇の中に一人きりでいたこともある。今、彼の傍にはトゥマやマウンサンカインがいる。何も心配はいらない。闇が終れば光に至る。闇は一晩以上は続かない。少なくとも明日の朝には、太陽が必ずや現われるであろう」¹⁹⁾と…。

彼が最後に希望を託すのは、エーマの妹トゥマや、落盤で死んだ熟練鉱夫の遺児マウンサンカインら「光」の世界の人々である。大学生トゥマは、コウミンが炭鉱に入って一年後現地学習に炭鉱を訪れ、彼と知り合った。年令より落ち着き上品で、エーマとは対象的である。会うごとに変貌するエーマを見るにつけ、コウミンはトゥマの清らかな世界にひかれる。トゥマにとってコウミンは不可思議な存在である。まわりの男性は皆羽振りが良いのに、コウミンだけは何故ボロを着て迄信念を貫こうとするのかと。しかしトゥマの世界も闇とは無関係ではない。それは闇商人としてのエーマの生活力の上に成立する。裕福で優雅なウーミヤミンの妻子の生活と、本質的に相違はない。そしてマウンサンカイン属する鉱夫＝労働者の世界もまた、完全に光に包まれているわけではない。川の兩岸に位置する炭鉱は、雨季にはしばしば事故が発生して操業停止となる。克服されない自然の暴虐のもと、作業の停滞は人員削減を促す。炭鉱労働者が失業しないという保障はなく、彼等が闇の世界に転落しないという保障もない。光は闇と表裏一体である。炭鉱は、コウミンを労働者階級の一員とするために、そして奸計の世界に対立する世界を示すために設定された。しかしそこにおける労働や、働く人々の意識や生活の描写は少ない。「剣の山」批判は、労働者でないタンジャウンに労働者の看板をとりつけても階級闘争を描いたことにならないと指摘したが、コウミンが名実ともに労働者となっても、今後「闇撲滅闘争」で労働者階級の英雄性が発揮できる見通しはさだかではない。

「剣の山」批判は、現状打開の方向として曖昧な「闘争」をいたずらに書くべきではないことを促した。にもかかわらず、誤解の要因となる「剣の山」序文が撤回されないのは、ミヤタンティンが「労働者の英雄性」―少数の英雄の犠牲による変革に、一縷の望みを託しているからに他ならない。「タンジャウンのような人種が十人もいりゃ、この崖を畑にできるだろう。ジャングルを切り開けるだろう。山をも砕けるだろう。海すら転覆できるだろう。きつとな」²⁰⁾というナンダーの言葉のように…。闇が現実生活に不可欠であることは認めるが、それは撲滅されるべきである。しかも「英雄」の指導によって。ミヤタンティンのその思いがコウミンという観念的な人物像を創造した。ここに「剣の山」と「奸計の国」に共通するミヤタンティンの問題意識―労働者の英雄性による病める社会の変革―が存在する。しかしそのような英雄の形象化に、ミヤタンティンはいまだ成功していない。

おわりに

ミヤタンティンは「労働者の英雄性」による社会変革の夢を追い続ける。それが人物像から現実性を奪い、曖昧な構成や通俗性をもたらす結果となっても。彼の「原点」である「新文学」論争の影響は依然として名残りを留めている。戦後の文学の階級性をめぐるこの論争時、彼はその急先鋒となって芸術至上主義派を攻撃した。²¹⁾「大多数の人民の苦しみを描くことによって、人民の精神を高揚させる文学、人民の抑圧される人生を繰り返し描く文学」²²⁾を書くことを主張した。作家の任務は「事象をその後からとらえるのではなく、予見し、人民の人生に近づき、人民の進歩と、搾取からの解放を目指す人民の文学」²³⁾を書くことであると主張した。彼は今も変わらぬ魂を持ち続けようとする。「剣の山」と同時期に書かれた「私が続きを書きたい小説」の登場人物ニョウトゥンに「私は時代がどんなに変わろうと『ストライキ学生』のニョウトゥンです。現在の私の気概は、あの頃のニョウトゥンの気概、ニョウトゥンの魂です」²⁴⁾と語らせるように。時代がいかに変わろうと、抑圧される人々を解放する文学を書く気概をミヤタンティンは持ち続けようとする。だがその文学は、労働者階級の英雄の「闘争」の描写ぬきには考えられないのか。そしてそれを書くことは現在可能なのか。ともかくミヤタンティンは、表現の可能性の限界に挑戦した。そして今、彼は再び小説執筆の手を休めたまま十年を迎えようとしている。

(1985. 6. 17)

注

- 1) 10ヶ月近く月刊シュマワ誌に連載された後、1974年9月出版された。「剣の山」序文の日付けが1973年9月27日なので、「剣の山」執筆後からか、もしくはそれと並行して書かれたものと思われる。
- 2) Mya Than Tint: 'Kyundaw Setywe Yejindhaw Wuthumya' 1974, Rangoon, P.5 - P.9
- 3) 文中の用語の下…はすべて筆者による。
- 4) ミヤタンティン 南田みどり訳『剣の山を越え火の海を渡る』1983, 井村文化事業社, 序 P.V
- 5) Mya Zin: 'Over A Hill Of Swords, Across the Sea Of Flame' Guardian, 28. Nov. '73
- 6) Tekkatho Win Mun: 'Myanma Wuthushe Thamaing' 1980, Rangoon, P.31
- 7) 1963年長編「私の愛しい夫」出版後「剣の山」迄長編小説は書かれていない。ただし「私の愛しい夫」は1961年に執筆されている。
- 8) この批判、反論ならびにマスコミ等の批評は冊子「剣の山論争」'Dataung behma Kalaung Taik Pwe'- (出版者、出版年なし)に収録されている。以下、マウンターノウの批判を「批判」、一読者の反論を「反論」と記す。
- 9) ミヤタンティン 前掲書 P.292-308
- 10) 「批判」「反論」共に婉曲な表現や類似した言いまわしの反復が多く簡潔明瞭ではない。従って本稿では紙面の都合上、引用ではなく要旨を述べるに留めた。
- 11) 毛沢東の「人の正しい思想はどこからくるのか」『毛沢東著作選読甲種本』人民出版社, 1968, P.383はじめいくつかの発言にみられる。

- 12) ミヤタンティン 前掲書 序 P. i
- 12) ミヤタンティン 前掲書 序 P. i
- 14) 桐生稔 「陰の経済」綾部恒雄, 永積昭編『もっと知りたいビルマ』弘文堂, 1983, P.244
- 15) 高村三郎, 毛利卓『国境貿易』弘文堂, 1984, P.175
- 16) 高村三郎 前掲書 P.144—158
- 17) 高村三郎 前掲書 P.157—158
- 18) Mya Than Tint: 'Maya Boun' vol.2, 1976, Rangoon, P.408
- 20) ミヤタンティン 前掲書 P.219
- 21) Maymyo Moe Kyi: 'Myanma Sapay Taik Pwe' 1969, Rangoon, P.363
- 22) Mya Than Tint: "Yane Myanma Sapay" Maymyo Moe Kyi, ibid. P.368
- 23) Mya Than Tint: "Yane Myanma Sapay" Maymyo Moe Kyi, ibid. P.369
- 24) Mya Than Tint: 'Kywundaw Setywe Yejindhaw Wuthumya' P.231

以上